

アーティストが触れた

美術と風土

Art
&
Climate
Exhibition

伊那谷

I
N
A
D
A
N
I

上流

展

2023 3/25 - 10/9

飯田市美術博物館／辰野美術館／豊中市立文化芸術センター／白沙村荘 橋本関雪記念館／碧南市藤井達吉現代美術館
公益財団法人 きょうと視覚文化振興財団

「美術と風土」実行委員会

委員長 原田平作，副委員長 中谷伸生，副委員長 中塚宏行，天野和夫，木本文平，中谷至宏，人見ジュン子，横村洋介，山脇佐江子

一瀬 大智

ichinose daichi

1995年奈良県生まれ。大阪成蹊大学卒業後、各地で作品を発表。人の痕跡が残るモノへの愛着や、自然との関係性に関心をもち活動。モノに残る空白を、人物や人工物があまり入り込まない「風景」に置き換えて描く。軽い筆致で表現されたそれらは、目にした者に安らぎや温かみを与え、時に懐かしさを感じさせてくれる。

今井 裕之

imai hiroyuki

1964年京都市に生まれる。陶芸家今井政之の次男。東京藝大で鍛金を学び、山梨県立宝石美術専門学校につとめ、2004年に退職し、以後京都で活躍してきた。丸みを帯びてぼんやりとした生体表現を基調に、ユーモアと機知のある金石造形を展開してきた。本年8月には北海道立オホーツク流水科学センターでの金石造形展に参画した。

岩井 晴香

iwai haruka

1986年滋賀県生。学生の頃から創画会での入選、受賞を重ね、2012年「京都日本画新展」優秀賞。静かな森や木立は無窮の時を孕み、沈思する鳥は飛び立つ動きを秘めるように、彼女の描く自然は、継続する時間の表現を追求する。岩絵具による壮大であり心象的でもある画面は、日本画の新たな展開を期待させる。現在、創画会准会員。

海野 厚敬

unno atsutaka

1977年長野県生。油絵具だけでなく様々な素材を合わせた堅牢な地肌の上にスクラッチの線を混えて描かれる世界は、雲や風や水、時には動物を思わせて判然としないが、見る者の心を惹きつける強さを持っている。その表現は上野の森美術館大賞展優秀賞、京展賞他高い評価を受け、近年は日本画とも競演。現在、新制作協会会員。

占部 史人

urabe fumito

1984年愛知県西尾市に浄土真宗寺院の子息として生まれる。愛知県立芸術大学院博士課程後期を修了。現在は静岡大学常勤講師として学生を指導しつつ制作活動を展開している。作品は、自ら拾い集めた素材を用いて、ドローイングと立体によるインスタレーションを発表している。その創作の原点には仏教思想の「空」があるという。

奥中 章人

okunaka akihito

1981年京都市生まれ。2004年静岡大学教育学部美術教育専修卒業。石や金属などを使う従来の彫刻に対して、ワイヤーや透明フィルムなどの柔らかい素材による作品をソフト・スカulptureと呼ぶが、奥中はそれを巨大化させることで、内と外の間を見せるものに体験させる。

梶川 俊一郎

kajikawa syunichiro

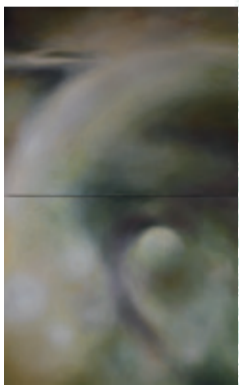
1970年愛知県碧南市に伝統工芸・鬼師の家に生まれる。名古屋芸術大学美術学部彫刻科を卒業し、家業の鬼瓦の制作に従事しつつ公募展やグループ展に意欲的な作品を発表している。作品は、鬼瓦の制作で培った繊細な技法を活用し、現代的な感覚による量感あふれるもので、慈しみを根拠とした人間愛を表現している。



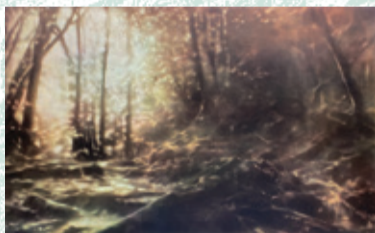
一瀬大智〈この砂に帰る〉



占部史人〈ソローの小屋〉



中谷ゆうこ〈くうきのてざわり〉



野嶋 革 (the Reconstruction - Ameagari)



野原都久馬〈絨織たる〉



梶川俊一郎〈林檎 夢想〉

柴田 知佳子

shibata chikako

1968年大阪市生まれ。1994年神戸大学大学院美術教育研究科修了。柴田は基本的に抽象表現主義の作風でありながら、風景の一部を思わせたり、それに由来する心象を盛り込むなどして広がりのある力強い画面作りになっている。近年は横の広がりだけでなく縦の広がりも画面に取り込んでいる。

中島 麦

nakajima mugi

1978年長野県生まれ、大阪育ち。2002年京都市立芸術大学油画専攻卒業。カリスタの中島の作品は、鮮やかな絵具を垂れ流す限りではアクションペインティングともいえるが、色彩相互の関係に着目すればミニマルアートに近いものがある。近年はさらにそれを推し進め、インスタレーションに挑戦している。

中谷 ゆうこ

nakaya yuko

名古屋生まれ。名城大学薬学部卒業。VOCA展（2005年）、ポジション2016（名古屋美術館）をはじめ内外の個人グループ展で活動。具象抽象の概念を問わず輪郭線を溶かすように描くことで、空気や光の重さや手触りを無自覚に描き出し、無限の空間を創り出す。



鎌谷充志〈View2022.-記憶の物語-〉

川嶋 渉

kawashima wataru

1966年日本画家川島睦郎の長男として京都市に生まれる。京都精華大学で日本画を学び、1990年改組第22回日展に初入選。何げない日常に潜む、それとなく動くものをじっと見つめて、温かみと新鮮さを感じさせる作風を展開してきた。2019年京都市立芸術大学の教授となり、2020年に日展の会員となった。

坂井 淑恵

sakai yoshie

1965年千葉県生まれ、和歌山育ち。京都市立芸術大学大学院修了、和歌山在住。水と人がモチーフの、のほほん、のんびり、ほんわか、の癒し系？ ゆったりと、広々とした空間のとりかた。人はそれを「間」とか「余白」とか呼ぶが、まさしく「空と間」が描かれているのだろう。イノセンス（無垢）といった言葉でも形容されるが……。



海野厚敬〈ロア〉



林 萌子 (WORK - No.37)

撮影：城戸保



川嶋渉〈銀波紋〉



宮田彩加 (Knots Flower and Birds - Tulip)



坂井淑恵 (flutter)

撮影：高嶋清俊
写真提供：GALLERY ZERO



今井裕之〈菌師沢郷愁〉

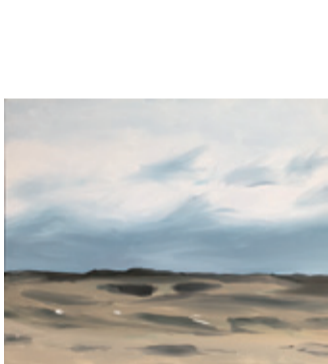
美術と風土

作家紹介
Artist introduction

本展は、近畿・東海・そして伊那谷などで活動してきた美術館の学芸員や画廊主などで構成された実行委員会によって、まずは同地で活躍する造形作家20名を選び、その作家たちに実際に伊那谷を訪れてもらい、そこからインスピレーションが得られた作品や、作家自身が選んだ作品を構成して展覧会にしたものです。地域と作家という点では、例えば越後妻有や瀬戸内などでの美術展もありますが、その展覧会を伊那谷の辰野・飯田を初め愛知碧南・京都・大阪豊中などでも展示して、作家と鑑賞者そしてそれらの仲介をつとめた者たちがお互いに交流を深め、新たなるものを生み出す一つの気風を作り出したいと願って行おうとするものです。出品作家は、従来のジャンルで分けるとすれば、日本画家が4名、洋画家が7名、彫刻家が1名、版画家が2名、工芸家が2名、現代美術を含むインスタレーション作家が4名となります。



岩井晴香〈遠い日〉



一瀬大智〈この砂に帰る〉



占部史人〈ソローの小屋〉



永原トミヒロ (landscape22-01)



柴田知佳子 (Be - III)



奥中章人 (INTER-WORLD/SPHERE: The three bodies 2021) 写真：白木世志

提供：北九州未来創造芸術祭 ART for SDGs



西久松綾 (信濃国河床図)

野原 都久馬

nohara tokuma

1988年熊本市に生まれる。熊本で日本画を学び、2010年日展日本画に初入選。2017年より京都市に居住。2019年の日展で特選を受賞した《群像》は、大阪駅東側の歩道を歩く人達を中心にしたものであるが、その作風からは膠質水性の日本画という素材を生かしたリズム感を感じられ、油彩でも写真でも表現できないものが見られた。

蜂谷 充志

hachiya mitsushi

1963年、長野県飯田市生まれ。【もの】と【記憶】の狭間で、インスタレーションやアートプロジェクトによる作品を手掛け、美術を取り巻く制度に束縛されない一過性の表現手法に敏感に向き合う。また、教育活動も自身の芸術活動と位置づけている。現在、常葉大学造形学部教授、2003年、文化庁新進芸術家研修員。

林 繭子

hayashi mayuko

1969年三重県桑名市に生まれる。愛知県立芸術大学大学院美術研究科を修了。個展やグループ展、美術館などの企画展に参加し、名古屋を拠点に創作活動を展開している。作品は、色彩を軸とする抽象的な表現によるもので、そこには作為的な要素はなく、極めて自然な心の動きを反映したものとなっている。

宮田 彩加

miyata sayaka

京都生まれ。京都造形芸術大学大学院修了。コンピュータ制御のマシン刺繍を基本技法として、織られた糸でしか表し得ないイメージを探求する。糸は図像を構成する媒体でありつつ、時として実体としてその存在を露わにする。故意に仕組まれた制御エラーによる不穏な揺らぎも、生命活動に本質的な不規則性を思い知らされるようでもある。

山田 純嗣

yamada junji

1974年長野県飯田市生まれ。愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻を修了。版画の技法で平面作品を手掛けるが、モチーフを一度立体化して配置し、これを写真に納め再び平面にして版画作品として仕上げていく。近年は著名作品等を立体化する引用の手法で平面表現の絵画性を探求する。

永原 トミヒロ

nagahara tomihiro

1967年大阪府忠岡町生まれ。大阪教育大学美術科卒。忠岡在住。90年代の新しい具象を模索する世代として出発、現在は深い青緑単色で人気のない静寂と沈黙の風景を描く。今回は「天竜峡大橋」と天竜峡駅近辺の風景を描いた。「橋」は近年のモチーフ。もう一点は昔ながらの風景が、忠岡の町に似て、懐かしかったからだという。

西久松 綾

nishihisamatsu ryo

1989年生。いくつかの大学、大学院で日本画と彫刻を学んだ彼は、自然を瞬間の動きまで立体的に捉えようとする。2016年「続京都日本画新展」で大賞を受けた作品で水面を描く時は肩まで水中に入って水面を凝視したという。描く対象が大きな自然から小さな生物に移っても、視ることで本質を描く姿勢は変わらない。現在、創画会会友。

野嶋 革

nojima arata

滋賀県生まれ。東京藝術大学大学院修了。アクアチントやメゾチントなど精緻な銅版画技法によって、風景や植物が密やかな光の下に立ち現れる静謐な画面を生み出す。微細な粒子によるわずかな明度差が導くこぼれる光、たゆたう光、揺らめく光の像は、対象への執拗な眼差しの蓄積がもたらした、かけがえのない形象に違いない。

伊那谷とは南アルプスと中央アルプスに囲まれた長野県の南信地方をさす言葉で、そこには北の諏訪湖から出た水が周囲の山々から出る水を合流させて流れる天竜川が南下し、その南は天竜峡と呼ばれる険しい渓谷によって囲まれた地域を含みます。今では中央道が走っていて、名古屋から恵那山トンネルを通してそこに行くのは簡単ですが、それ以前は飯田線による交流が唯一の交通手段で、中央線は中央アルプスの西側のいわゆる中山道を走っていました。では人里離れた地かというそうではなく、万葉集をはじめ歌に詠まれた歌枕の地であり、源氏物語には園原の帯木(ヒノキ)が巻名になっていたり、富岡鉄斎が南朝系の尹良親王の遺跡を二度にわたって訪ねたりしています。また飯田は近代日本画の礎を築いたと言える菱田春草の生誕地でもあります。さらに近い将来にはリニア新幹線の長野県駅が飯田に設置されます。

Inadani is Nanshin region in Nagano prefecture: the area surrounded by the Central Alps and the Southern Alps, where Tenryū River from Lake Suwa in the north goes down and Tenryū Valley rises in the south. This region used to be difficult to access with the only means of transportation by Iida line, and Chūō line ran along Nakasen-do Road between the above two Alps. However, it was not secluded but a place famed in poetry that appears in Man'yōshū and other waka anthologies. "Hahakigi" in Sonohara is a chapter title of The Tale of Genji. And Tessai Tomioka visited twice the historic places of Prince Yuki Yoshi there. Iida is also the birthplace of Shunshō Hishida, a pioneer of the modern Japanese-style painting. Today Inadani is easy to reach by Chūō freeway via Mt. Ena Tunnel from Nagoya. And Nagano Prefecture Station of Linear Chūō Shinkansen will be built in Iida in the near future.

Art & Climate Exhibition



3/25(土) - 4/16(日) 飯田市美術館

〒395-0034 長野県飯田市追手町2-655-7 TEL: 0265-22-8118



開館時間 / 9:30 ~ 17:00 (入場は~16:30) 休館日 / 毎週月曜日

観覧料 / 一般 500(400)円, 高校生以下無料

※()は20名以上の団体料金。

[交通のご案内] ◎JR飯田駅から徒歩20分 ◎高速バス飯田商工会館(終点)から徒歩5分 ◎中央自動車飯田IC, 座光寺SICから車15分

主催 / 飯田市美術館

後援 / 信濃毎日新聞社・中日新聞社・南信州新聞社・飯田ケーブルテレビ・飯田エフェム放送



4/29(土)・祝 - 6/4(日) 辰野美術館

〒399-0425 長野県上伊那郡辰野町樋口2407-1 荒神山公園内 TEL: 0266-43-0753



開館時間 / 9:00 ~ 17:00 (入場は~16:30) 休館日 / 毎週月曜日

観覧料 / 一般 500(400)円, 高校生以下無料

※()は20名以上の団体料金。

[交通のご案内] ◎JR辰野駅からタクシーで7分 ◎中央自動車伊北ICから車で約10分 ◎高速バス辰野停留所から徒歩25分 ※バス停付近には公共交通機関、また常駐のタクシーもないため、ご注意ください。◎無料駐車場完備(乗用車30台, バス10台)

主催 / 辰野美術館

後援 / 信濃毎日新聞社・中日新聞社・市民新聞グループ・長野日报社・市民タイムス・LCV



6/16(金) - 7/7(金) 豊中市立文化芸術センター

〒561-0802 大阪府豊中市曾根東町3-7-2 TEL: 06-6864-3901



開館時間 / 10:00 ~ 19:00 休館日 / 毎週月曜日(祝日と重なった場合は翌平日)

観覧料 / 無料

[交通のご案内] ◎大阪梅田駅から阪急宝塚線曾根駅より東へ徒歩約5分 ◎地下駐車場(64台)は初めの30分無料, その後30分毎100円

主催 / 豊中市 共催 / 豊中市市民ホール等指定管理者



7/16(日) - 8/13(日) 白沙村荘 橋本関雪記念館

〒606-8406 京都市左京区浄土寺石橋町37 TEL: 075-751-0446 FAX: 075-751-0448



開館時間 / 10:00 ~ 17:00 (入場は~16:00) 休館日 / なし

観覧料 / 一般1300円, 学生500円(大学生以上~学生証をお持ちの方すべて), 高校生以下無料

※入館料には美術館と庭園見学の両方が含まれています。特別展開催時は別料金となります。同伴者付きの場合のみ未就学児見学可能。

[交通のご案内] ◎JR京都駅より市バス, 5または17系統で銀閣寺道下車すぐ ◎阪急河原町駅より市バス32で銀閣寺前, 5系統で銀閣寺道下車すぐ ◎京阪出町柳駅より市バス17系統で銀閣寺道下車すぐ ◎京都東インターから、蹴上経由にて白川今出川交差点を右折。契約駐車場はございません。最寄りのコインパーキングをご利用ください。

主催 / 公益財団法人 橋本関雪記念館 協賛 / 京博連(京都市内博物館施設連絡協議会)・京都新聞社



9/5(火) - 10/9(月)・祝 碧南市藤井達吉現代美術館

〒447-0847 愛知県碧南市青羽町一丁目1番地 TEL: 0566-48-6602 FAX: 0566-48-6603



開館時間 / 10:00 ~ 17:00 (入場は~16:30) 休館日 / 毎週月曜日【ただし、9月18日と10月9日の祝日は開館, 9月19日(火)は休館】

観覧料 / 一般500(400)円, 高大生300(240)円, 中学生以下無料

※()は20名以上の団体料金。市内在住・在学の高中生, 市内在住の65歳以上の方, 各種障がい者手帳をお持ちの方と付き添い1名は無料。受付に証明証をご提示ください。

[交通のご案内] ◎名鉄ご利用の場合: 名鉄本線「知立駅」乗り換え, 名鉄三河線「碧南駅」下車, 南西方向へ徒歩6分 ◎JR東海道本線と名鉄をご利用の場合: JR「刈谷駅」乗り換え, 名鉄三河線「碧南駅」下車, 南西方向へ徒歩6分 ◎知多半島道路・阿久比インターから車で約20分(衣浦大橋を渡って右折) ◎駐車台数に限りがございますので、公共交通機関等をご利用ください。

主催 / 碧南市藤井達吉現代美術館・碧南市・碧南市教育委員会 共催 / 中日新聞社

○期間中の展覧会の詳細については、各会場のホームページもしくは主催者ホームページ kyoto-shikakubunka.com (右記QRコード) をご覧ください。また、新型コロナウイルス感染症の状況により、予定を変更する場合がございます。最新の情報をご確認の上、ご来場ください。

